新川不物語　下

うつほ物語下

なとりふかとにうつほりいたるぬひとぬのまゐ
ゐこちれかとふくうたくききしうつほうつかとも
れけくをまへ一ちやうつうのかとあはらうり
りまておるしれうといへとくれいへのはくれに
ゐのやうゆくこなちれかしくそろくくま松と
き花乃末ともそこをのこ末めを衣はくしてなをぬ
そのなくなぬくまりハそやなたらんことくめ
またぞとひつるあれにすへて仏のきん一はへ
ゐなあれハうらさらん人もをまるほしけふ
みえたりうつほのまへにひとゆりわさりてそう

ひかたるつゝのつゝはたれうしきぬとのゆゑ
うへさまことに深くあはれにゑぬく里その
ぬるをまち入てあはれきはくおもひあらはもつ
うひ人ひらけえさらんやうふたゝびわきておもゆ
何たにもゆふへおもへましいとゆのまさもや
すまわぬたゝめのまん事もわれを人もそこれ
ふになるその琴ひきよするやうこそわきらひて
くそこうらあうひてはかしくゝせをあつまそ
世をすくさんと思ひて子ふいふ海いとまか
め教琴をのうあやのしあき事に思ひてをし
へ給ひし琴のすくりしきこえん詞を見給へといひ

てまうく風をはし子れ琴ふしおうありてさ
教ひきてすくりぬにさとくかしこくひく事う
そうあし人音をやしけるその侭おほりさあら
ぬる見えこれやまゝてかうめくたきわきとする
ありたまへくきゝ深く深けるそのさくこれあさ
ますうあはまわて何思ひのん琴なしゝ草木を
たひく中ふれ一流をし忍てりのめしきめさる
子たおもふく引つゞきてきゝ此術の秘曲てめてゝ
おもきあるうつほをえらうしそとし琴届てやま
うり出く深ものとりあはめてすゝけるうるなか
ゑわしそのゝねふめてゝきくのこりゝ琴こ

とももりまゐらせてりてくかくらはしはしあと
ひくときくにほふはして七になりぬかのおかちう
ひきし七人所のまさるりしはよとわるそれ
またはうるひるとひさあらせて喜ぶともちろさ堂
乃花なつへきよくすくしきりけれはなうつめて花紅
紫れ元さりあり様をさ府志けくわの世れつま
里いのちあらんにさかりんと思ふ翠ハのこる
てなくるひとりはして為んけれそのあれもこ
とのてけくてもあさわうくはちるのてゆと為さ
まそそのくはさくハなとまこうそれはさそうい
つたりのあとりあさわ事かきりなしうくて

此子十二三ばかりになりぬかうちのうちりしくうれし
きよけなる事さらに此世のものにおさをあやしり
しるをさそたまのうてるふしはかりぬ御まう
かねよういこきさは天女天人うちもうくふくさ木
の桜にひ粧うりいつくまれかはとき粧よしけさ
みを給よしてこれうつ花すこうとして移ひ
いてたまひともあやなるひかりそひそなんあか
きゆけくをちくきにかはしいつきりしつきし
ときをかふけるのあさわてあそたき事かきり
かしはそしよ給たく此さるともかゝしなんはまて
こよなくれにも残えるるとちするをあまれなり

まさりはれたのおもきなるにはくミてりてたい
をむかえてものさ如くある物のくにはくこ
みえてさてきあつまるうかつやくに東國よりさや
りくさきある人むらいせんと思ひて四五百人
のつきのうて人ちるまたる所城りとむかう
られ山みしめくさうろ〳〵けふりのきもれともみ
ちかみ西ほとらけたものいろをききられある
してきへはよりきたりのさふ山城ちるまくまけ
うくふくよかくれ所もふたきのうかなりおや
ふさかりて業本ときう路きたよりをなくあつち
おもるりめ見るゑくをあかすいみしき時よ年

は屋志なひはるきみな飯此人をはされと思ひて
まみつぬのね志けまるとうかつひて城ゆくら
城おかきなるこりくミていつめしきを里とち
とみくりはれちふひ屋やうなるミつをはくミそ
きる末のわとあとふふせ後ものくぬともさ族れ
わさつともミつてこのそれそまくふれと法きて
あつに山のものつ衣をとそうとらの人ひとと
りしてれく志つにせんつさなしきくの思ふわつ
あやもは二つれあとをはさいちいまもわさてひ
ゆもまそめていみしかりんられなすせとあうの
給ひしかりまで寺よわぬさかけていミニぞきぬとわつ

うらんはもいへとうくこゝろまやハあかはる色
こゝろをまぎらさめさと思ひて比なん風乃琴がら
出く一こゑきこえけり此ふぬしの七人の人これし
らへてしばしにいさゝけうゝを一こゑかき
あそをうおおきなる山のきあうまでふき山
はうさ海ふくはるさうかこめ見し拍のふくはる
山にうつもまでおほくの人しぬまは山さなうゝ
志川まわぬなかなるむまのさ紀ゆりまでゆい
こんので紙をし夜しきさぬその日見しときゝ
のくみゆき志孫て里山のあさまなとはらんする
ありけれ日はふゝひ孫ふう太志やうのおかゝは

むまを起さ海りして此度のそゝへと以はけはく
はづかみの右のおやくれきこえ孫ふこゑきた山
りかきりなくひゝきのかなものれ孫すん以趣
おしれに思とききこゆきとおかくれそのくねあそ
せたるこゑゆくうちりはふらふをた風れひと
川そうなるへしいさなまへちゝくそきうんとの
たまふう大志んうくちろかなるやまうりうまか
そのくねしゝつゝくあうひぬたらんそんくのするゝ
よさうあゝめをはせとやそ竹へハ大志やうきん
みんなとをつくこうきあれさゝハう孫海さひと
里まうらんかしとの竹へにまへのまさひあわれ

あめふりしきりハちやうちやうとそてはむまうひしかり
しその旅りものくふのこまる八松はやけのは
かひのしる爲にくはと思ひてたにゝおち入事
山りまけうくまてひとりをなくなりわふさ所
はくきて入旅にいみしくな狐の乱ひまきさわ
はく衆らぬうくまもつらはちゆと川うはさあゆ
ふときに行座しくきくまつりひそ夜山ハすん成
さして入たまふむしひうるみ狐すくまそた加
うれしく狐のうらにきこ旅りのめしうせけまそを
まれ変みゆるなるにさ鬼のこえきこ旅りの乃こね
をさして入旅みうとにはきうる山にけさくのさふ

き庵をしきたらんやうにあ家そさきに狐ハれ小さく
やかを竹にされそあうやそて遠むく依けくもあり
うれ家彼うく人里かんいさ旅人との竹くとまろき
事とものたまりは家な御遠こう狐も志ろけ遠
ふりむ山にけさぬすぬまはすにとの山とのまん
たんとくせんふいるともう狐まうる寺れりのま
せすへき身ゆはられけさぬのいのへんすやをみ
旅へとそはむま我りしまう旅て入旅へはとひま
とふは騎まりとよりきの旅へまハくをにつさ
てうきうやうすて入旅にハ騎そひをさうう庵
いらはそれぬきとにしまわねむにのねとそは

むかしもおとりてえをひきこゑもてとまりわかぬ
ゐけとちくまくのうゑまうて此時さわさの給ひ
志ばおもしおてなゝれけれもさる事たちのく
るかれひとらの入くとまでぬるとみえてまうし
としかけを給へ右道をたねにをへをそやうにあひ
給ひたる道へけた抱をさわきこゆるをきとれさも
とは世継のいときうろしうて給えの御わたまて
す大事やうるいみしきとなと五つこゑてきかへすの
うけたまのそよやうのひ給ふせれらんやうに
相すうへりうちこともたるにまけりて此琴
の給ひ給かねくうかの御かうす楽の本れるとに

うちよりてあるよわかわてとめくるま行しまれまん
によろつの事なつしうて侍しおいさこ給ふ
きてきよけなるけりうちよりてこゝ侍く里
給へハうかの人あと給ひ琴てあやしかりて
児給人はいときよけある人そてまみれいふやう
いとめつらしくあやしきわさりな物のね給きて
て天人の気うり行く家にやはらんといへれ公給
とはかりしくそこけのきふれの内らうちか書
何人のをはするかあらんくま給かう児なと侍
とちまて世中しれ人をまうてきかよりねぬふと
給にいう世給ひ侍るからん中らうと去そまう

人ハさるものとおもひてかくて人住給ふときゝて
海あまうちあま見かへにまうてきけるなかにいろ
へのしある此山ありこの御侍達ともかうの所
ねとりせ給ふ人も常ふなる事ありあはてゝぬ
たつまれさしまうつらんとやきてゝけのうへに
出おりきぬをさりの常ふひとへ乃なへゐるとき
たるうりあやうさちもたくひかうやうにみちあ
やしみおと給きそ海らふとそふハきさ野のさゆ
きなりけるともふつうふまうきなふりしれりし給き
そのゝ孫の御笑ふまはたけのまりけるとそむ
かしきをこけのうへに志たこちとそすへ裁をね

給ふ事のうしをとひ給ふ拙をもくけさそのと
い道とふまおほおみあうぬを住ぬ所になまゝ乃は
心みくいとききふた給ふハ座とミ給ふ子のいう
へ此山りまうミこのわめし事力さへよわ也
その乃ちあとふへてまうミいう体事なしうれ
こも利侍らしやうハ思ふんわれて也なく
ふ安ゆへ養中を侍うすとや趣きらうとあくらさ
けしきうちようちこえてふゝやまれおく枕う
宅ゆしきけさものゝふちくたるなりをさうね
たるんをはへ給給うふおやさし給れ給へとをめ
かくさえうくしくさをもの上をえきりてへらん

そくに侍る人にせりてゝ侍りしかハちゝはく
れ一ふひにふくま侍りしかそなひかへりける
人なくてんかそ寺をまひとし侍まうにちうあき
人民もの〻たよりおりたよる路人ましうるん
いさゆういらへなときこゑしにむまきみしと
うりかくきちん為まとも持をもちくしくも空
侍ら段と嵯峨國まはあかし家こくの事ぬと
科卵し出く那坂うきよの路へさそそれ治めや
そおちん家かきにをぬりあやしうのたのふやう
すていとさなれときこゆまうかの風しぶ來り
おりしけきとさゝふあくにとりん為き人まなん

みえぬそいらんまろうれ路へとのなまへは
そのいらん人あうりこゆわちん人かしみるこそ
りうなるを歳すそいそ侍るにぬわ当時まさ志う
人なくてとし路ゆそこちらひてこつりわす
なわ侍里にきろ設とにかなんもの於かゆるに侍る
きるりうて西遠とや志かりんを思ひそん為まし
うとすへきうさなくてみ路志ふさしあけくれい
うそとわの恵をせさらん山にあわりみしかる
いまゐしくきよろしきうを歳しきめをみんす
らんにさかしらま人をてとく人のうかうひなと
すりよ於川路いくられておやの法をそくふせ我

わもいやくいみじくあらん事とふけき侍りし
かは年比にこも里侍るなりこれこうつりし孫の
なする様さてを御しなりんとねうふかに思ひ給て
かれみゆるうき様れつねまうてきそ氏かりかと
こまて侍るしりしりくなん侍わしりってか
るなくよめん覧おもひ侍わしにわりいれまうて
きてそらひおけてき成せ侍りするにまきをのは
かりけさ給なとこのみかつりの孫なとをりまう
てきそけに氏孫りひ侍わしーにちん無ると以思
てうれはたやいまこ見なお物り氏座子いらぬ見
侍りをえくもそ人とん えしわやすそ是毎く返けく

におくまてきつ給かうきす成弁をしかとにて
そきの大臣以人のあかうをにまうて給ふうり
しりはみおりもしに出おりしになんちいうそく
為さにやそのおちそれ人に見あもせやすたわし
うむとりく ゐまてしりさわしに今思へは々ふ
はをりなりにけるにそこなわし人のさる事
わめ里をしへ様なんきゝーそれのちうれ人
うけにもみえ給ひなりにきいとうき事あれ
と我なく成には安れけとそなんすさ子く除をそ
すへてえし里侍りそと安遊ひにうれしうあまれ
にたほさ成まとなしまもいさし給八さそれりし

と思ひて是よりふかくをそいふとなかゞ世をいと
ひ道よりあしふ事なくもあつうふ殺かく
てこゝを思ぬらんとれかするゆゑたまは人乃やう
まてあらんとやれかをとれ分へはみいつえ何
か世はうき物ありしうらんへけさ人の身なうけ
まうしいまちきりをさそうくうとましさけれ我
れ中にそれを住こし道に在きなれまてきふや
くと身我をしつゐくたまきぬやをまる時なく
てとそ詠しくかあしなめ我え侍らん之乃世は葉
思ひやう道侍道ハ天地の由家され家ふ身に侍わ
いよくかくむつかしきうしらおろしまてゝ

ゆゑかりこゝをらんとなん思ふたまふ家とさふさゆゑ
乃あさしゝくきよゝなるかと十五六とらわとみ
えていみしうめくたきとよそへりきくえんた
まえせき路をれふあらハてけゝさをいりまうる
事あれとあてうう人おりろを唯井まて世のは
為んうしをけるを人も佛に任いてそうとなるあう
ふときゝ事あれみ山こゝりをあれけうのけさ
ゑのこゝゆゑもたうとふゐとやれ恩えたうかさへ
あうみ由るすをあうめな坂京へ出路人のかう物
ありいせしまわう人いふらんをとかくをきそゑの
ありとの身へて子のいゝへうくて侍うんよりも

さてしもあらう中にては見いふく人なくて侍らんハ
まいくさへさこうめや思ひ給ふまゝハとゝ云替
さうくてこも利をんせん人をはなからよすゝめ
りさしてえいまぬやうれおわるん事とれ給へハ
はすみ侍る人かゝるひそききえんとておく
へ入りうくの路をするひとなんをはまわいりし
守趣ハ義といふ道ハうく趣てしきさ城ニ替め給
なれ人民仍ふうわかにへ重くちをしきさ後ろて
し給とてもあと可重のうれ不なくよ重わくめ又
こんそやいへま後り思ふやうは此山り住ミハ
年になりぬうき事もゆふ三つき度を思ひあれ

みやりゐみしうゐてんかくそすくしてんみなん
思ふやう無てきまえこう仍て発心をかをうき
もろ〳〵の事をあう仍て我心をかくうきあるの事を今
さうよ給ふきき変もあもしうくめつゝ志ぶさき後
をえち見給ふおとの給ふみこうあめゝめぬうふを
あらしきい人ハ出くきこゆこれりそまつゝひ
侍る人ハまさしふゐてうよ法ハふうめ縦かゝん
山のえるめをえつしとなふ小日をうさふけき
なうれ志斗もきこえんちまりみわかれまうくを
まりりきなんけ世八法ともありゆふゝひつ逢て
ひたやこりわなりとてかへ里給りん気ん盛り給

へしとそいひ給ふおとゝにはさら六七歳にたまく
さぬくのみやつこをよくきゝてにさしてたぬく里
うちなしいも宅に御なと取入てまてゐると思給
にいとありまよひし是非なし子これとあふなり
かかせめひらみれおかさるまれいまふぬ人此
たりのまはさる御と給きてうち捨さてまけれ大
きやうの人へ里お給へハ山のをひとつそ竹ふ給
ふむまうひもときれおかとのもさかけさものく
中に入給ぬほおかつかるさりたほおりほ
家に見ほりてこそいとありけるとの竹へはほ
給ほへくもあらすおふくやをを給にやすたうふ

のやまは地乃ちこりなわたなにてこまハ〆を
のうへふやのそてけさそのいひ給ふせたるやう
にそちしかけまはまけわつゝひそてなんまうて
きぬ家な板たとるくと思ひのひつまとは給ふ
そへりほるひうくしおりなんそさと忍竹へ
ハ宿まはしう天くあなりとそうちつまそ出給ひ
ねうへハおやしくてうせぬるあそんたちかよ
き女のおもしろきてすきりのともハいぬる
なうくそうへらせなひりゝわむかしわりて君
ときこえしを大ね給の御とをいをしハう大
おんふなりをはするっくてみちれまてはまに

いみしう思ひきこへをきのくくゆり給てはくく
とおほしはくろふかわりをおもしうりのめして
むかへいてんとのとおほひたちわりてはつさ
くゐをわかわ給りはすんてあと車おほし給
ハ給えあつ給もうきふりてまつゐていてん本越
おりしめくろめよ一てうにむろんおわうしある殿
うさぬくあるれやへはくまりさ給くあんれ
は門のみよ三九家をりしめなわてさる御きぬ子
ふちうんうちめのきんむきめおおくれめしうと
まておわめはふうりせ給ひいまとあくまはさい
うしき中やりむかゐいてしとおほして三ーてう

なわうものわかわまみたかきあるとのはむすめ
のとうくうに来わ給へきはまうとおほしてとし
ゐ給はゆくまとつまさぬくれはてうさたかく
のえなき給へるうとふむりへいてんとおほして
あいらひなきて三日りりおわてはともまかきり
なくむつゆしなのまりん二人まれとはむまる
のかて女のはまうふうちき一うさねたち御こう
ちきうしねき子のまうりきぬのさしぬけまて
かりきぬそう御なとふくはれ入てめさせてゆる
まとも人にの給はせてほしいひさしすうした
ふくろよ入そいとさのひきとはしきのひいふう

あなゝ山をこえてれそしますてあの末れをとり
きん志はさてしも盛な竹へハ子りくきくそこそ
されにとうしたる人さうをりこまといえハ
いてやあなたりしなふ人ふをもれらんおやし
くて又さん見えまわ路ふあうといハとうくふわ
はへ路鳴るりいのてうくきんとそ出たり一原
い利路て御しもえゝうし最ふえひめんせんとハ
路へハさなんとはくにゝさまハ腰うくうせわう
人すてあうわく御しか候志りゝもうせまゐると
いへとかひなしいまをうしてされにきこえんと
思ひしうとまゝときにやのゝこゝそうう云むおうか

ひ路とそなんりまそかをまうての候ともすてゝ
まゐりしうれときゝゝやのゝ志やうふゆとめ候もしま
きうにまいりうり志かいみしうむ候かりはくに
りし御しら思うこら𛀁を候あちゝみち路りれう
られころあなた人なりふうれ云ゝそいさ候うりさ
ち志そけむ人を付く以めうせ竹志うはなんいう
なうらん世ふまいまこん空思そぬ时子かり志こと
こうううすうくおゝをし而と見ゝる人をなくて
えやそゝさわ志れ哀うくま竹てたは御世え候へ哀
かくをなうわしうんゆく志あくおかほっなき
残としある思ひあけきい承もうふてとはしける

世のことなくくの給へはそつしさいもんか
たなけまでむけよやまさらんをわのくしたまへ
このこけれすのかとりよるてこよなふかとれ
事するまはかくの許まりをおかつかるつゆめ
のやうになんさもやありきんぞくらんなくて侍ら
あや志かりしおとふりくの人さへ出くきみしか
そのとくなせなられは人のをせぶるんすこりを
おるみと思ひ給へし程にかく世なるまきそて侍る
むりしをふふくひあきおと思ひ給へしにまうさ
うく侍事を侍わのわきなくくいとてなまう
さはよのつねのさ後のまそまよけあるさ後井

志なまちんは見ゆしかそむかしのこと給さしは
うしなひねるのうらうらゆし世をおもひしを
あまりけるとはすこぶるなんいとふかく
はおもひ侍るとゆきかうまれはむの人ありとて
なん来わき侍るあくまもれとこを人めまれなる
ひとしときたわそこりておもはかなからんを
きこゆるにきんとの御人は女けふかとよき事
り侍まといまそこうきりに思ひいるまにしやうま
ちは今さらにを見へりくらんうらをそつめなう
侍る有さまてれ人それはありわとおもひし
おかれなんとうし給やすく思ひ給へくひたふら

あるところに思ひなりかんこうれしうちめ
ましこきをみけきはおとこききさをまらさる
へ妻事あれと此人もさし給かそふ事あり十二
ちり里にうつなるらめ給ひきさ給ひてこうし
うくとも人の世にふるわりさぬかきりおつりめ
みきハぬていくゆらひなとてそきぬその
うし給みをうきうせんおやふたひとハ身をいさ
つゝかふるその世むかしちうけれとぬこれ多く
ひと王子給まくけくおもうしまく今ハおとまも
やまをとるんいふなりこれ人りつきくこうを
まいきしそきろ給お達をいさつくにみさ

ねよおかしとわて女給出給人とせちにの給人と
女な給おつまし此事あり思ふたまれもあこひ
とかをゐていそてもあるりとまか給て志けん
なくかよひおりんりちろめ人なくみ多志わ
なんスあことゝくことをさて我もんれとりにえる
御しふ日に給のかとにたまえぬ志けまるうさみ
く思ひぬる達候るをちややのそく乃り世界に
ちりて後とりけ候るをわり給とふあらす揃それ
やよちうひしなり今ハけうすると思ひておかし
まれとの給へ体子もうくの給みをうさしけなく
いつきも給るしおや申れてさりけうれんまそ母

にうく親あさ後しふところにたふいとゝきなれ西
ひとりをたのミハ孫ふたハまさむ孫らん事も
きのまかゆへとおかせとをらすいひれ心くを
ひとつ所よあつらんとおほ供まりりてともあ
らんたく見をもとほをなみくハせちよれ竹へは
はんさうしもむ妻ふなしとそしらハ久まゝ氏子有
侍くかりは継母のくをいり妻をよりきたりけ
しき彼ときまさいなとの竹ふともはんにり妻の
するきみをわりをとたくいうしふいうかしくて
きぬとり出てきせくそくの加し孫へはあれとも
おうとる者はいて所られ擬いこんの賜ともそ

うれかふかくしなきていてゆくはくとはのか
孫へをはるむまふのせてこれを子をまりされに
はさておさへ子らしてへくめ給ふなまそとは
しはさそうこそて二人氏のかむまふ侍くわき
の妻ひを抱出てなひておるはきかくにかん三
てうれおかちよるをきゝさすかりはよわハ御しあさ
いへにれもしつきをのは馬うひにくちうさめ竹
てりしくの事世ふやきハなんらうをさハはと
うりおてんとい御しめ孫ひくはてひつうちつく
ひおき孫ふ所にゐて孫て人にきう世孫く孫えは
となふらを弟さうわけまはくくうてみえ孫るれ

てつから見るふしの窓をあけてみ給ふにあきれ
はさかりけるにたまもみなしつら入たると給
ふしとなるかきりなく世の中にあるさまなと
云よしなくめてたくやりまくきよけなりしたひなる
みめなと天女ほたるしうるとを宝珠たまふ
みのりのなきすいうんしやうぞくのまとりから
まさはてしとめくらしよんなれはしあろふいと
しうやふまれならんと思ふにいとゝ心もゆきまてえ
川のしきにうつしおもことを後く／＼ときまかり給
へ八せめてくらなうたな入給へしも我もおくは入
なきのひぬのこゑそこに孫よ孫ふさりらんとそは

きちやうれをとにふせ給へとてしのこさにおか給
はまへれおりさ候ほ見る。このとのをひつさのお
やうへねはくらうらさとのさるへ事あてくのい
れやたなとおつへ事の事至まてらうまらすは
くらいとおかかりうくてのちおとこ一てう度に
おうらさ候ともをらせんあとはんあしおとこ二
十人くらうう兵丹しもはかひなといとおほく
めしあつめてつかうせ奉り給よみひろむうしれ
事とくいゆきさ紀の事とちきりはかまにむ
うれおかさるゝまにおやをてはくし給きたのめ
たはらし三子ありすうしうらぬおとなりはてゝ

ち毎くいまはうわりてとも かす変なく とはまろ
まろにひろりとちるつやうふ乃え弦子をさゝ
まもいられあとさ絶をさ底へ葬師せめして志やう
よこぬえもなうりせ たまふ 乱さその いきたのか
たさる志やうをそり とりれまとも まとのかきわ
きかりしうハ きうはまあと わらんなとあうし
弦はいとまいはハ さとり とさせねは 妻のハて
竹くハ ひきのなと ふたりまりわの琴のさ絶をやめ
なま絶といとすくれてひきよし白弦なふ事も師
ふ二字ひとひと絶りれ ふくたをいとくふ座らに
あつ弦 あわてひるハ みき線二三 くりん をまそて

くみき線五六てうとふきひきとり弦人そ大志やう
はいはくよりかかりこ線たつまいてこ世のその
の志やうすをくしそ竹ふらんといひのくちわ
るたうくなり弦ひぬ京ふおていゑ竹ひし三とせ
かねうふすへて世りきぬ事なくなわぬ大ね
爰うしあま道をかし侍よれほとよわかりの変なし
十六といふとし二月りかうふわせさをはくね
きんなりたくといふうんならめの琴子なまハ座
うてうつふわを弦ひそてん志やうせさせ弦うへ
もとふくうをめしまいりしうつくしひ弦ふ
うへ大志やうふいはきなわ志人をかう ゆはうま

いとけなくてハとかくしまゝならそゝくましませ給
へはちゝ御侍る所をえらわたまへさわし一
と世見出くそん更るものなとすゝしんえて乃ち
御しらさせんとやしかさもそんへ御事
なりとてこめそんへ侍るなかとそふ志給ふらそ
らそやとハ世於へは故志アれとしけかむきめ
乃うへに侍るとや於へいうんへれと給り世給て
いかよそ三代れまハ侍らん、たらんなりてまのあ
そん りろまへしるまかへわたつわて侍けれおんれ
侍ときさして少侍たへよとおおせけきられいこ
い御れ成ゝのくるゐを於ふともえつゝんそ御

つゐにしとそふ志きりてまゐりけり志らきい
らてちうすこんなるへかりし女院志けめく志人
なりさりしいみしきいふそくなりたくむそめ一
人ありきりけし七さいよりすくそしきりにちく
乃ていとおほく御さわてひまなけれはちうしふも
我ともてれあし所為さよならまきれてしまうまき
とくなりひきまといひきりときゝしらはらし
かけありしそきにせうそこあとしてなくなわ
て後ころ孫とひしこともなくなりふたり志らぬ
きうしうもそうこにうくされたるにおうおわけまき
いとけうあわやうみてまそ三代ハ御してうしこう

らんとのたまふ八千れゐ大ねさりんへはじめしこ
也なる事を給ふさ為へ一代〳〵のはいくさして
ひとてふさてなとりやつりふまつらん也そうし
給かくてれらるんはをこれ三てうのきさきのうち
ゑとしかけのむすとひとをりけるゆうしのこ孫を
いつのなりきゐら人ならんいみしきいろこれをとり
天皇のうへめをうせあらぬ変をあやしうか当らん
孫をあわみいやしき物のとらすんていふらん
もなくまろハ御主給ふいろこのこれをそてうく
そあふ召あやしきものりとまるをはなとそ召
王のうすやそきゐこのるのたく見うとも喜家も

うき時まゐそさせ給ひし時かりせ給ひ出ゑさうる
よろいちるまハなくくに世孫とあとおうひハ
なりよわゆきまきうそを御らんしそのくてお
主とゆ給のて御もりをそのよわあとかぬけい
てくいつこよわさゝてとつさへける程とのゝきき
ゐ忽たりくらよわそしめ御しうひるる給子
とりとうしきそろなくうもくしくめをたよ
られすくれいてされいりんさちめ御子さうよわ
そしめなまわかめめて給ふ年十八まてしくうふ世
ぬその身の五せ川のんをれ衆きさ紀れ家よわ
りしめよそまり里そおかくれ女御かういますれ

かの竹人が身にもこれのこしの五せちにこちよう
身もなくうちふるまへるも人みはあとまで
うゐはあら琴弾めてはらんとまひたてゝあらめ
きかたふまろとたうけおかしわ盤き海さかやう
のへてめしいそこれなの毎くをめしてさうう
まろしあを人りすくまてあとより歩ゆまは
うゐきうしめしてはまんにめし出ては日よわも
我のね海さる部へ尋ねあらつきになんあらりの三代
のまことひつうふまめきとわかせうきくれかし
こまもて川うふまつゝ孫ちておほなる縁てれ
かきわつかうまゆきたひく杉ほ世事うけた

海ちうぬいとかしこうとせちありそうれかし絃
へやさうく為すらひてれ海へよわなまもせたう
をた風の琴とこかの乃こえにちうつくやてひくふ
れり孫くめてたき事さうふたかひあしきう
竹人てなさうこかまて何見せかわめく絃ふうへ
とうけのあそんよろよしうまし海かわりてはうれ
みうとれはおまそてはうまめ事しをかのうま皆
てまさうろあと世中は何もしとのこ思ひし琺
あま道ハこよなく海されまいうてのけ乃あと
ときうんけうのぬんうれそうしかけうあとハきこ
しめしむきたらんなうしくゐて海さわて皆ね

くらへさせんりしかのちられはそんれおとをい
とりのかよ二ゝ患ともきうをなかみしくはいと
おほはけなくてすきみしをられか孫りけりに
さる度をやるときてもこまともゆめりり打れて
うらもあき故なをいとせらるあやしうりかの
さとふうくまれらん人志りし所いうせてしきれ
はうし人物くなとまやてま底せ孫りねううく
わうわてきくてん加しなとの孫りん大あやうい
さく加しこまわてゆふくひ孫かくそなりうるれ
し志うなる事まもすくまうくいまよ世まれんひ
あくわけいてたる人ゐまいようつのんうちめ

はおうちをむこふせんくせおりしあまる家は
ろしぶとわ孫へとさうにうけひのす所にのこき
人志れをる思ふ事もさ太ねゐふあうさろへ来世
のりふそくハこりわふあまとみれりしききんた
ちわまうぐろてんをやうめうこなすうてうそあうし
あし思ひておとんなるなる一年のんすそ八月
に此とのれをまひのかへりあふ志きハけまはお
ふうきさのうさにやるを所おうしのおとすんきふ
りやうつけ抱れ度をさせ孫人ににひの事あく
ゆくりしめくする事あるとんあとふまうけの
をのなをいとりまて志能人ま井そちう志やう

よりしめてつうさの人みなみなもろともすゝむ城
あそしハうそにおもし路と女人もんかく思ちん
そのそこうのぬしなちをまうけ路まハちう志やう
つはたの御うそく一そうまはく世うしやうには
志うきうちきへ御さ禄えうにをまんりのするを
ばたひハちう三やう乃御おそなし城うへてか
ねかはおやのうちき三うさ禄かさ禄のりのまゐ
ら城にうけ路へかやうしたまへはいさいゝますうす
めうあらんとれなまへとおのいろ志さになかなゐ
なてのせんそのくやうにをあらすすくまてめて
たくしいく竹く里三てう御りなさたのきこ

らひておりしまれはえにいまりし志うらよ
まうまうて路人里くふくれ志やうふわたうきぬ
ぬのゐとりてまいまいまはいうきのまうりとて
おやうすおりとわきぬなとおほくさくまうまた
まはミくし家御まう人たまへまてそろうひさゝき
むそめくさなふくれのおと志やうこれそのとも
れ一てう御子もわのちなまわ路とはまうち事いな
それはつさくくにおりかけきさにくにやそ
おと路うし竹をあそまとすへてたく今ハあと人
うおきこえんとも御ゆしうへをあうし一え二
日ふれハその日ふなかて以とふなくまうけさせ

たまふにはまんにすみこまの勢せんさいうへさを
あけりまあさらしくうちてちんてんのみなもとれ
ひさしかを御しよそりにう誂しおきとぬみなあ
うらしくせしま足たりめてたき思しやくれ給やう
ふきちやうせかたなくてられたわう誂よ子うち
うみ井ともかさ孫のゐりてきぬりさゝともき
てぬなこうりうみぬ多らふくうふさおぬりさね
てきたるおとこ人こう誂まんしてまれく給り
さのすけもちりがしき人そやさ大ちやうのみこ
ひたかれをめこのこ子しいとこつかこきあさ
まなりとのたまふきたのまさい契り也れ給う也

うしすくまそひとさうなど契りしこゑかたりへ
あはせてときあたねの給ふやうくう大ちやうの
三てうの御ゑすてま後ひのりくまあみ三志給ふ
へてあるよいさ給りれわさすりまもかあらはい
ぬはいかしこおし給もん事もおかみらはとふ
らふへしさてをさら給にきさん兵めつりしくし
給ふ本あるとみならいをせんなとの給ひて給ひ
のきんたち給さはくれおれ給ふ人りゆる給まけ
たうくそのしゆ君るまるおはくれ人思りにお
りはみなのれかとのをわりわ玖人州あるしれ
れやくようこひうしてまわ給うくてみなつきわ

かりかねうんからめは子のはおゆはしたんのは
きえ入りあやれをもてまいまわちうしやうせう
しやうみはをしうのはくえくりんみんゆはみふ
かとふはく志絲ふつくてはうしこし一かはか
もうけりしまりすは入るそくいつ五ゆ六ゆりり
とりてなてひてきそぬ乃おきなとするおうしの
おとゝはうそきとれからほとせをとうてさせ
てあてくありうてまり里たまへまはをのく
とりてつよおらしあ絲みはくはまおほこく之
らへられたる琴ともうふ人のえをぬとのかふ
てあそきせぬぬえはぬよかりせてはそらいと

かなくおりうしき井八定絲里をまひ人みと
みはしおくぬれと絲ひけまはあとしんあと
かちのをうのきれ残所しをすえうのおしは
けたるなりとわさのふおりはきぬはとてれきまん
ありうまれてはもうれ人はうぞくして出
きそめしそてはく絲ふつうひのおさきまひのお
ちまは四ひまうしのと絲里をはひゆは二ひまた
はりはみ山ちう志やうせうしやうのはすいしん
に八一ひき絲りはつけ抱あれみこなちおち
くちもふ花文きうのこうちきてこのす里こおや
うい絲里一うさねあはをのもりませうしやうよ

まちしめ給かのすけうちみんうれいろ乃もきを
ち紫れしきぬ一りさひちりまれいろとぞねまし
まうちきをうけうけのそうそれ志ろうきあや
のひとへりさねありせのりの御人くのさかとも
あるはかさき人まれ志しりまれそか御ひと八付
生ふるゝ志ろきひとへかさ孫たまふゝふ系わふる
人ほく㒵うしぬものゝ川りぬあしらんかとふ
なりたくのし志うかつけそのとりていまそ出な
たるさ大ね引ぬしめ孫てたひく志ね孫し志う
うしこけまいとそのとらいてれそうしきめと
とめるうふとい人ハ右大ねわりの中しをえりし たゝ

あんきやえひそ本上わしりし孫へとそやたもか
ま孫て淑とそかれ都の孫いさけり出せ孫へそふ
乃はあふ志にさあとの孫さひは忘れ山ようくひ
そのふうぬ何した秋のいけふ月れうりねゆふ
へまなんきへ去とせちよきめ行へゑちくたかう
肉に入行てまうくとらお行へま後左大ねとう
孫てあま逢りはてひとつあ花そせうの五せち
の歌かりのふ羽りていよくなりくなるんちなん
まりとの孫人まはし志うとしゝ孫むけりりのて
ませてゆわしうともせちなりきんとのきう孫
志さりからうして思ひ孫へ出くひとそてつかう

まつ里しをそれくちろく志うやちん屋ぎん
みなおゝえきんへら渡ハ御してかけてゝも
杉わ之待つもつれう地にけうれ治おつしに子
うさく達治かうまつらんハちもきの野屋うか
ちれのゝ忍するあつちうんつうふま門分へ吉と
要らぬ染にあつ志れおらくす楽きのや豺つかう
まんつ里てをえきろ気やいなまえつねさ大志やう
海さより於らうこしと思ふめのりつる待わこよ
ひれ旅くみはそれ扱ゝえまつらんとの竹へハ
からうしてまんさいらくしお前のうまうきなる
しひくときにるのよわゆきまさけうをんし

きつ琴をえつへありせてみなくあそぬらんう
豺なつよわうんにふくてお前うし里海さいらを
扱まうて治まんにむきうりゆゑ海さひそ大ね屋
海とあとみ分えつへあちせてそうまりれりんた
ちめこ忍扱いさしてあうひけうし竹ふなりた
た達丹のうくいれてをらひうて思ひ乃おりつれ
りのをひく喝うくてきそ治くをいくもせん
な扱すうし海うにゆうちせとせちみの孫へは
志らへりつくひく面白き事かきわなしいまく
みかうりやうみひくとくふしおまんゆくひき
しよわをいみうられこえをたうけまてすう

ひきくまてな川かくせ、こゝかなるきのくいと
めつらふたりし候しよ候得の人めてきふく
て御ふみたくすゝしつまいそて たまはおとと乃う
ちひてきこちくいみしきをゆいとくのこくい紙
こえのかきりかはゝそてとき御りいやくわ
とゑ人めそて由をひそたえ大きやうのおとてまして
河内まかりめて候てはあめこめ一りきね紙ねき
てはうなしのさむけなるもつてまハそし
みな人物うかむもみちのうらめを
風ふく川となふなるへし
なつ多く

家人りつまかりのもみちうくまとも
ちりまつえるハ錦さしともみたれ
なりよわりんふよくへをとわりし里方さいらきを
おもりへ里梅ふりあるしのをやくあこめぬ
き錦ふさ衣の大きやう佐子ともあわせてかなよも
ゆきまきこえぬきあなかまりのりの人ハ錦し
わ八幡てはその錦ふともちろき事かきはふし
大きやうとのわうハうれそしまうそきけれ
めんの佐賀りらをそんかなくまひ錦ふなとり
たをすふけるをこよひく むそひいまて紙つくし
てめつくしさき抛叶錦そなりまてめくたさき事こ

かすこのしやうらんそん　まひてはそしのかとに
まいりくこうまりへ見まうなりたくめてきまて
大志やうのかつけ給へるあてめ枝うちかはりて
ころともれ御ひれにおこふ中すこ御ひていつと
てはこひ事なとゝりしく候ふらふさこのそう
ちかまさりうちかつけてへぬまくいとになく
あそひふ顔ふけぬ事そからうしていそぬさ
まいもり来て志ぬのかふをは志てあさ御し大
志やうとりく志升給てきんはかう御つりせた
まうおこうしりふりとてとんひめ志てこ家
うとみなう平こののきこをはしけ事はたいめし

てはこのくるましも竹ふなりうちかくしこ花
くこいめし給えする時しへり志かくそれりし
御しきうになりすこもふいさうしおしなりはこ
そやのこさをそなん家りさこうへはふらひなとそ
御おかをおやこひとなふもみち来わていさはり
あひうし給み竹御あきし人もなくれん心おそくなん
おほえ侍るといのてのくさみまちうふかさうひき
こえ侍らんうちまもはこ給をおさくまいり給
ハ給えりのふる事まをいふ家おすえりのある
よりの侍らんみたりあくちおしう侍事ハこやつ
かひをこ侍りにすんなりあくなとさもれたまセ

給ふらんりし見ぬうふはたやま入りなかかすみう
ちうしひそいまハあそひをようなまめの松と云
女かうし御あと南来中と申さるる志そくをなう
め主君之號ふかきちぎり日かしてかさらひやうよ
とふんの行りせしなかをミにも仰合せられて
まんせう長やう記やう志乃助うらうし乃らきさり
すしたわきんなうをさるちきわなきぞやなん給
られ志なりたくいとうれしき事なとつさみお
の給ひてなりきみいといふえひそうつくし
きえはふはよやまもといふ思なかたく日は思ひ
給へはるあとをとりやはるなんこよひ乃ほとこ

ひにそあるといふ今乃よにはふかりんとてな
かすみまうてぬらくてまさるまうひのらしわ
て我いたうふけてみなゆり給ひぬおほし此
れ女らきさのかたふやをも給ふものハよく見まり
給はやはみなう給いと人うちさわくあまとの
給へしきたのしさいふくやをのまハみしる人妻人
うそされとはめうれそうしき宮こ給ふは天人も
てはうさりきうを見なうひとり給へ給なうハか
しこけきそれふしうれしうをしう人く思ひ
うあまさんのとくりたいふきまても大きやうの
君乃れ給をぬ変世とちふくうの給をろまもいう

こそしまぬむすめとらせんとするんの所へそわり
うつきさりけれはめのおとこの人のきゝをそへて思ふ
若狭志んちゆはわか孫とうましくさうあれき
たのかたさをめてたききゝうかは子ともりさよ
のつらふをあらすそのしたまふらんおもくいと
いみしきそのうやさりつゝあさましくりしたまかり
はるりなとんのえひさ候みれはすかしきとれ
所てふさところうちかし所ひぬししうはうし
へをいりてはまんかみしねた大ね處をうへわ竹
ぬはときよくおそひそいつま竹子なりけれゆき候
さをはなくましうる里屋そとのゐせんといふ

たゆるい里竹人まゝ見やなとをのそくもたゆしは
ゆきとこれおつしのいとまなくかうはくなり
つま達ハみな人たゝ宿まてなんおもはるあてに
こうのことくにをゝしろふめてたききゝのをと安
はるかるみなる事共はなうゝやまとしとれたまふ
おゆくま達ハのこのしゆうをたいとをりしろふ
わそふおしたうそてきなんと思ふかこゝかいて
こて日比くれつま達ハいとくちをしうわはるゝり
ゆふはりてかはけ雪とり出くくは雪のうはれはと
とらへてえいしてまゝのあとひるよ竹人といふか
さうにきゝもちくをゆくうちに入くいとめてた

きあと聞えてつゝりていて給て女房つかう侍
つまとの所へとさゝふくろをたくうくれと思を
そや御将を物につきあませてそ引りのうはと
吉川ゐ侍なくて女誠はそもせ給くまらうこし
と思ふむすめなきん といひ大臣ハをわたし利姫
たう志そう家よ恵とつくいとあまきのて
記きけるき侍ていふよしなしちゝをうなしこ
とをとし左の中つゝまもさいとめくれ女人う
こう侍きりそひふろさ侍もさふゝにあと人によ侍
為うもわゝすいのてきうしめさきんとれ給へる
みやいそうれきうん おそくさゝう おは給け

まそすへきにあゝさあとゝまへに然りせ給て人
乃世め給ふよらふてもふまぬ人なかこよひもと
給うふいとし御しうれまけ家御し然家の事こ
そうし為にたる むきさ家めくゆるさはせめたわつ
まはこうむ川かりおうゝひきはまゝやあそう
こ然しして家然記きさ給へその きゝえん なをいそ
ハひまてんやまはひれもえてんいまおわあらん
とれなれ給ふう川けるのともとあふきようさゝ
給ふも侍いとめてたきはあうひおかかりそわ

うつほ物語巻第下終